

**球磨地域における晩期栽培「ヒノヒカリ」の生育・収量特性**

晩期栽培「ヒノヒカリ」は、6月15日移植の普通期栽培と比べて、出穂までの日数、稈長共に短くなり、収量は、7月11日移植で約15%、7月25日移植で約50~60%減少する。

農業研究センター球磨農業研究所（担当者：藤本 仁寿）

**研究のねらい**

球磨地域では葉タバコの後作に焼酎用原料として「ヒノヒカリ」が晩期栽培されているが、その生育・収量特性は明らかになっていない。そこで、球磨地域における晩期栽培「ヒノヒカリ」の生育・収量特性を明らかにする。

**研究の成果**

1. 出穂までの日数は普通期栽培と比べて、7月11日移植で約15日、7月25日移植で約22日生育期間が短くなる（図1）。
2. 稈長は、普通期移植と比べて、7月11日移植で約10%、7月25日移植で約30%短くなる。穂数は、7月11日移植で約15~20%減少し、7月25日移植で約15~25%減少する（表1）。
3. 収量は、普通期栽培と比べて、7月11日移植では穂数の減少による $\text{m}^2$ 当たり籾数の減少のため約15%減収し、7月25日移植では穂数、一穂籾数の減少による $\text{m}^2$ 当たり籾数の減少と登熟歩合の低下のため約50~60%減収する（表1、図2、図3）。

**普及上の留意点**

1. 2012年~2014年に球磨農業研究所（あさぎり町）の表層多腐植質黒ボク土の水田で実施した成果である。
2. 晩期栽培では、いもち病が多発する傾向にあるため適期防除に努める。

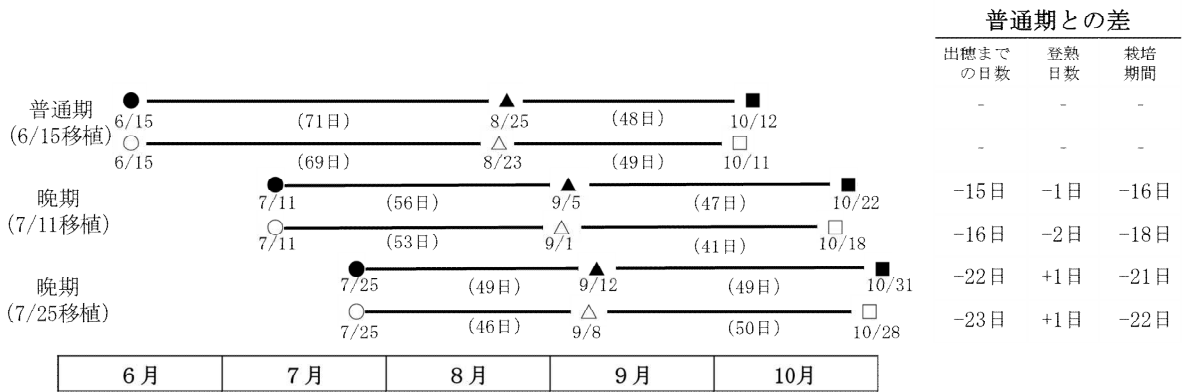


図1 移植期別の生育ステージ (2012~2014年の平均)

注) ●: 稚苗移植期、○: 中苗移植期、▲: 稚苗出穂期、△: 中苗出穂期、■: 稚苗成熟期、□: 中苗成熟期。  
 耕種概要: 育苗期間は稚苗で20日、中苗で30日、1株4本手植え (18.5株/m<sup>2</sup>)。施肥方法は、a当たり窒素成分で基肥0.5kg、穂肥0.3kgで実施した。

表1 移植期・苗質別の生育と収量構成要素 (2012~2014年の平均値)

移植期 (月・日)	苗質 <sup>1)</sup>	稈長 (cm)	穂数 (本/m <sup>2</sup> )	わら 重 (kg/a)	屑米 重 (kg/a)	千粒 重 (g)	一穂 粒数 (粒)	籾数 (千粒/m <sup>2</sup> )	登熟 歩合 (%)	精玄米重 <sup>2)</sup> (kg/a)	収量 比 <sup>3)</sup> (%)
6.15	稚苗	80(100)	366(100)	a 65	3.1	22.1	83 a	30.3 ab	86 a	55.4 ab	(100)
	中苗	80(100)	341(100)	a 62	2.2	22.3	92 a	31.3 a	85 a	58.3 a	105
7.11	稚苗	74(93)	292 (79)	a 53	2.4	22.7	85 a	25.6 b	86 a	47.4 b	85
	中苗	72(90)	291 (85)	a 49	2.0	22.8	87 a	26.0 b	85 a	47.7 b	86
7.25	稚苗	58(73)	287 (78)	a 34	3.8	21.7	63 b	17.8 c	55 b	20.3 c	36
	中苗	60(75)	300 (88)	a 35	3.2	22.3	63 b	18.6 c	68 b	27.4 c	49

1) 稚苗: 20日苗、中苗: 30日苗

2) 1.8mmの篩で選別した。

3) 6月15日稚苗移植を100としたときの相対値。

注1) 稈長と穂数の()内の数字は、それぞれの苗質で6月15日移植を100としたときの相対値。

注2) 英小文字は多重比較 (Tukey法) において異文字間に5%水準で有意な差があることを示す。

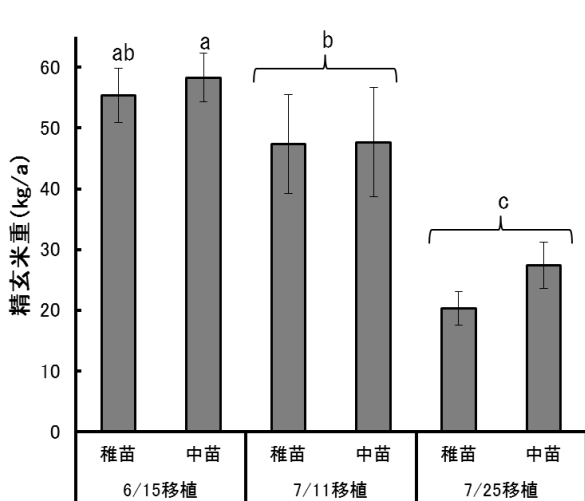


図2 移植期・苗質別の収量

注1) データは2012~2014年の平均値。

注2) 英小文字は、多重比較 (Tukey法) において異文字間に5%水準で有意な差があることを示す。

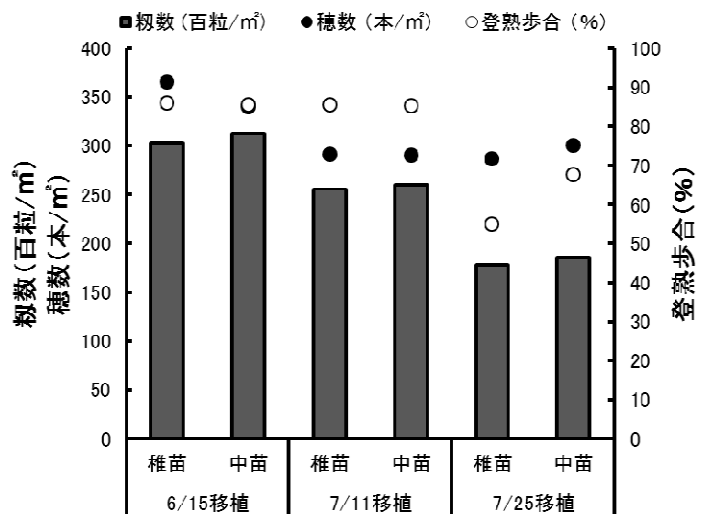


図3 移植期・苗質別の収量構成要素

注) データは2012~2014年の平均値。